

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：15301

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12206

研究課題名（和文）東方キリスト教における「説教」の研究：聖と俗の架橋としての「説教」

研究課題名（英文）Homilies in Eastern Christianity: Homily as a bridge between the Sacred and the Profane

研究代表者

袴田 玲（Hakamada, Rei）

岡山大学・ヘルスシステム統合科学学域・講師

研究者番号：30795068

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究を通じ、パラマスの説教における人間理解では、原罪からの解放が神化＝救済概念に重ねられており、神化を果たした典型的存在としてマリアが位置づけられ、一般信徒にも神化の道行きを歩むことが推奨されていることが明らかとなった。また、同時代の歴史的資料の分析によって、パラマスとイシドロスによる民衆教化運動の実態も明らかとなり、これまで世俗から隔絶されたアトス山との繋がりが強調されてきたヘシュカストたちの、都市や街での一般信徒（とくに女性や子供）とのかかわりに光が当てられた。こうして、14世紀のヘシュカスムの、世俗とのかかわりやその影響関係の広がりが示されたことは、本研究の大きな成果であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究を通じ、これまで良くも悪くも世俗から隔絶された存在とみなされてきた14世紀のヘシュカスムの、世間（一般民衆）とのかかわり、その影響関係の広がりが示されたことは、本研究の大きな学術的意義であると考えられる。このようなヘシュカスムの在り方こそが、後の『フィロカリア』編纂・出版にも大きな影響を与えたと言える。また、本研究において明らかになったパラマスらヘシュカストたちの人間観、とくにその女性理解は、これまで十分に光が当てられていなかった東方キリスト教的な女性観の解明の一助となったと考える。本研究を通じて構築された英国・フランスをはじめとする国際共同研究の礎も、今後さらに発展させてゆきたい。

研究成果の概要（英文）：By analysing Palamas' sermons, it became clear that his understanding of human being is based on the concept of liberation from the original sin, which is closely associated with that of deification = salvation, and that Mary was viewed as a paradigmatic figure who achieved it and encouraged the laity to follow the path of deification. In addition to that, a close analysis of historical sources from the same period revealed the pastoral and educational activities lead by Palamas and Isidore, which shed light on the Hesychasts' involvement with the lay (especially with women and children) in cities and towns. Whereas their connection with Mount Athos had been emphasised in previous studies, it was a major achievement, in this study, to show the extent of Hesychasm, its relationship with the secular world, and its strong influence in the 14th century as well as in the later periods.

研究分野：宗教学、東方キリスト教思想

キーワード：グレゴリオス・パラマス ヘシュカスム 説教 ビザンツ正教 東方キリスト教

1. 研究開始当初の背景

本研究の学術的背景には、これまでの東方キリスト教研究の中で、東方キリスト教的世界観を特徴づけるような哲学的・神学的諸概念が理解され広く民衆に共有されるまでの過程における「説教」の役割が十分に評価されてこなかったという事情があった。

そもそも、東方キリスト教に関する研究は、同じくキリスト教の主流を形成するカトリックやプロテスタントに比して蓄積が圧倒的に少ない。これには、論証より体験を重視する東方キリスト教の気風や、東方キリスト教圏の教会の多くが共産主義体制下で弾圧を受け自由な研究が行えなかったことなどいくつかの要因があるが、より根本的な理由として、東方キリスト教がカトリックのような教皇を頂点とする強固な神学的組織的統一体を持たず、例えば同じ東方正教会でもロシア正教会、ルーマニア正教会、ギリシア正教会等々それぞれの地域で独自の発展を遂げつつ緩やかにまとまっているため、東方キリスト教(東方正教会)として一貫した教義や伝統を見つけ出すことが難しいという事情がある。このような状況に対し、各地の正教会の母体となったビザンツ帝国時代の正教会を研究することで、東方キリスト教(東方正教会)に広く共有されている世界観や伝統の源泉を明らかにする試みが19世紀後半以降盛んに行われてきた(ミーニュによる教父著作全集の編纂、国際ビザンツ学会の設立と米国ハーヴァード大学所属研究機関ダンバートン・オークスにおけるビザンツ研究部門の発足はその中でも大きな出来事であった)。また、J.メイエンドルフ、V.ロースキーといった亡命ロシア人研究者やM.ジュジー、I.オセル、O.クレマン、K.ウェアなど西欧におけるビザンツ神学研究の黎明期を支えた研究者たちの活動によって東方キリスト教研究は長足の進歩を遂げ、儀礼や慣習の相違はもちろんのこと、神観・人間観・自然観といった世界を捉える根本的な視点からしても、東方キリスト教はカトリックやプロテスタント等西欧文化圏で発展したキリスト教とは大きく異なることが明らかにされてきた。

しかしながら、これまでの東方キリスト教研究において、研究対象となるテキストは一定の素養がすでにある読者(多くは神学者、司祭、修道士など)を想定して著された哲学的神学的著作がほとんどであり、一般民衆を聴衆として想定して著された「説教」については、その「説教」としての文学形式上の特質が無視されるか、二次的・補完的テキストとして扱われるかのいずれかに留まることが多かった。確かに、司祭が教区(多くは一般民衆である)信徒を相手に語るという形式の説教においては、比喩やたとえ話が頻出し、反復や冗長表現も多く、或る世界観やそれらを構成する概念をそこから効率よく抽出することは難しい。また、典礼暦に即して朗読される聖書の箇所を釈義するという形式で語られることの多い説教には、伝統的に踏襲される一定の様式(パターン)があり、独自性が発揮されづらいという見方もある。しかし、説教の中で分かりやすくかみ砕いて(例示を交えつつ)説明されることによって、ある概念について同じ著者の哲学的神学的著作からは見えてこなかった側面が明らかになったり、一つの単語に込められた重層的な意味合いが判明したりすることは多々ある。また、ビザンツ帝国時代の聖書解釈は現代のそれとは比較できないほど自由であり、一定の様式を踏襲しつつもその中で当時の世界観や社会情勢を強く反映するものとなっている。何より、大量印刷技術がなく識字率の低いビザンツ帝国時代にあって、人々が聖書に書かれている内容やキリスト教的世界観を理解し、共有するための最も身近で強力な手段の一つが説教であったことは疑いようのない事実であり、今日東方キリスト教独自の世界観としてしばしば取り上げられるその人間観(とくに、原罪についての理解や、死と神化についての理解)も、説教の存在なしに人々の間で理解され、共有されることは不可能であったと推定された。このように、本研究課題の核心には「古代末期から中世のキリスト教世界において、説教という形式のテキストが果たしてきた役割はいかなるものであったのか」という問いが存在し、それに対し、発話者としての思想家(司祭)と受け取る側の聴衆(一般民衆)の双方の視点から分析を進めることによって、東方キリスト教世界における一つの具体的な答えを提示することを目指した。

2. 研究の目的

「説教」という形式のテキストに着目する本研究には、二つの主たる目的があった。

一つ目は、東方キリスト教独自の世界観としてしばしば取り上げられるその人間観(とくに、原罪についての理解、死と神化についての理解)が説教の中でいかにして民衆に対して語られているかということ进行分析することによって、同じ著者の哲学的・神学的著作からは見いだせなかったそれら諸概念の新たな側面、意味合いを明らかにすることである。

二つ目は、グレゴリオス・パラマスをはじめ、本研究の対象とした東方キリスト教思想家の銘々について、哲学者・神学者・修道士としての側面だけでなく、司牧者として人々を導き教える側面に光を当てることである。そして、その説教から読み取ることのできる時代背景、社会状況、当該共同体の置かれている状況などを通じ、司牧者として彼らが直面していた一般信徒・民衆の姿を浮き彫りにすることであった。

このような意味において、本研究は、一部の知的エリートのものとしての宗教ではなく、一般民衆のものとしての宗教として、その世界観を捉える試みであった。

3. 研究の方法

研究の方法として、まず、東方キリスト教を代表する説教者（その名声より「金の口」と称えられる）ヨアンネス・クリュストモスの『司祭職について』の読解により、東方キリスト教における司牧者・説教（者）の範型の一つを導き出した。次いで、ビザンツ末期を代表する思想家グレゴリオス・パラマスを中心に、人間観（人間のうちの「神の像」や原罪についての理解、悔い改めと涙についての理解、マリア論など）を中心テーマとして、東方キリスト教における重要な司牧者・説教者たちの説教テキストを、時代をさかのぼる形で分析し、影響関係を追った。また、とくに世界的にも研究蓄積の少ないビザンツ末期の説教をめぐるのは、パラマス、イシドロス、フィロテオス・コッキノス、彼らの論敵ニケフォロス・グレゴラス、皇帝ヨアンネス・カンタクゼノスの歴史的資料も分析に加え、当時の時代背景・社会状況・それぞれの置かれた立場などを明らかにしつつ、説教テキストを立体的に理解する試みを行った。

より具体的には、人間を「神の像と似姿」として捉えるという、広く東方キリスト教の思想家たちに共有されて来た人間観について、ニュッサのグレゴリオス、クリュストモス、証聖者マクシモス、新神学者シメオン、パラマスのそれぞれの捉え方を、彼らの説教の原典からの精緻な読解を基に、比較考察すること、マリアの死（就寝）と人間一般の神化（聖化）について、パラマスとトマス・アキナスの両者の説教を分析し、それぞれのマリア論とその背景にある女性理解を考察すること、コッキノスによる『パラマスの生涯』や『イシドロスの生涯』、グレゴラスおよびカンタクゼノスの両者による『歴史』、公会議文書など、歴史的資料の読解により、当時の時代背景・社会状況・それぞれの置かれた立場などを明らかにし、説教の内容と重ねて分析することが主な研究方法であった。また、パラマスやイシドロスが実際に活動したテサロニケやコンスタンティノポリス（イスタンブル）において、資料収集および現地調査を行い、世界のビザンツ研究を牽引するヴァッサ・コントゥーマ高等研究院教授ら現地研究者と意見交換を行った。さらに、2020年3月末から2022年8月末にかけて、英国オックスフォード大学にて在外研究を行い、受入研究者となってくださったフィル・ブース神学・宗教学部准教授をはじめ、現地研究者との共同研究や国際シンポジウムの開催などを行った。

4. 研究成果

上記分析から、以下の成果が導かれた。まず、パラマスの説教における人間理解では、アダムとエバの墮罪による父祖伝来の罪は、マリアをも含む、すべての人間に生まれながらに存在し、その罪から逃れているのは唯一、イエス（キリスト）のみであるということ。しかし、パラマスは原罪からの解放を神化＝救済概念に重ねており、（司祭や修道士のみならず）一般信徒にも浄化に努め神化の道を歩むことを鼓舞していること、また、最初にそのような神化を成し遂げた人間としてマリアを高く評価していること。その際、パラマスは人間における「神の像」を「三一性」に見ており、魂の内に存する「理性・知性・霊」の三一性こそが人間に残されている「神の像」であるとし、（霊によって命吹き込まれるところの）身体がその三一性が成立するための必須要素とされ、身体を持たない天使よりも身体を有する人間の方が神に近い存在として称揚されていること。また、浄化の過程における悔い改めと涙の効用が強調されており、それはのちに聖母の悲嘆という本研究者の関心につながることとなった（後述）。さらに、一般信徒にも、それぞれの置かれた状況に即して「絶えず祈る」ことが推奨され、日々の仕事の前後に教会に立ち寄って祈ることや、聖体拝領（エウカリスティア）に積極的（頻繁）に与ることなどが説教の内で繰り返されていることも明らかとなった。

次に、パラマスがイシドロスと共に行っていったとみられる一種の民衆教化運動の実態も明らかになった。コッキノスによる『パラマスの生涯』や『イシドロスの生涯』、グレゴラスおよびカンタクゼノスの両者による『歴史』、公会議文書などの歴史的資料の分析によって、これまで（世間から隔絶された修道士共和国）アトス山との密接な繋がりが強調されてきたパラマスらヘシュカストたちの、明らかになっていなかった都市や街での一般信徒とのかかわりに光が当てられた。パラマスとイシドロスは、積極的に一般信徒に彼らの教えを伝え、彼らのために儀礼を執り行っていたこと、その中でもとくに女性や子供への影響が大きかったことが、ヘシュカスト側・反ヘシュカスト側双方の記録から確認された。また、このような民衆教化の担い手としての修道士の役割を強調した人物として、シナイのグレゴリオスが彼らに与えた影響についても、明らかになりつつある。

このように、パラマスを中心とした説教テキスト、およびその時代背景・社会状況・それぞれの置かれた立場などを丁寧に分析することによって、これまで良くも悪くも世俗から隔絶された存在とみなされてきた14世紀のヘシュカスト（あるいはヘシュカスムという霊性運動）の世間（一般民衆）とのかかわり、その影響関係の広がりが示されたことは、本研究の大きな成果であった。このようなヘシュカスムの在り方こそが、後の18世紀にヘシュカスムの伝統に即して編纂・出版された『フィロカリア』にも大きな影響を与えたと考える。また、本研究において明らかになったパラマスらヘシュカストたちの人間観、とくにその女性理解は、本研究がその後東方キリスト教におけるマリア崇敬や女性観について一層本格的に研究を遂行する背景となった。ビザンツ初期から中期におけるマリア崇敬研究の第一人者で、これまで（西方のそれに比して）見落とされてきた「聖母の悲嘆」に着目するメアリー・カニンガム名誉准教授（ノッティンガム大学）との国際交流も、本研究を遂行する中で醸成された。

上記研究成果の具体的な発表の機会・媒体については次項に譲るが、オックスフォード大学で

の在外研究中に開始されたフィル・ブース准教授との共同研究や、本研究者の呼びかけによって The Oxford Centre for Byzantine Research と Maison Française d'Oxford、および本研究課題の共催で開催された国際シンポジウム Hesychasm in Context: Theology and Society in the Fourteenth Century はとくに重要な成果として認められ、岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科研究功績賞の受賞つながった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 メアリー・カニンガム（翻訳：袴田玲）	4. 巻 52
2. 論文標題 母よ、悲しむことなかれ ビザンツ説教と讃歌から読み解く十字架のものの聖母の悲嘆	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 エイコーン－東方キリスト教研究	6. 最初と最後の頁 63 - 85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田望、坂田奈々絵、袴田玲、山田順	4. 巻 77
2. 論文標題 古代・中世キリスト教における 女性 イメージの多様性	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 キリスト教史学	6. 最初と最後の頁 3-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 袴田玲	4. 巻 61号
2. 論文標題 トマス・アクィナス『説教18「地は芽生えさせよ（Germinet Terra）」』におけるマリアの原罪についての理解とその可能性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中世思想研究	6. 最初と最後の頁 67-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 袴田玲	4. 巻 23号
2. 論文標題 ヘシュカスムにおける涙の位置づけ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 パトリスティカ 教父研究	6. 最初と最後の頁 90-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 袴田玲	4. 巻 48
2. 論文標題 三一的存在としての人間 - グレゴリオス・パラマス「第60講話」における「神の像」理解	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 エイコーン 東方キリスト教研究	6. 最初と最後の頁 3-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 袴田玲	4. 巻 60
2. 論文標題 (書評論文) 大森正樹著『観想の文法と言語 東方キリスト教における神体験の記述と語り』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中世思想研究	6. 最初と最後の頁 144-152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 7件)

1. 発表者名 袴田玲
2. 発表標題 ビザンツ帝国の宗教と人々
3. 学会等名 就実大学公開学術講演会 (史学会) (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Rei Hakamada
2. 発表標題 Gregory Palamas and the Universalisation of Hesychasm
3. 学会等名 24th International Byzantine Studies Congress (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 袴田 玲
2. 発表標題 グレゴリオス・パラマスのマリア像:人間の救済におけるマリアの主体的・積極的役割について
3. 学会等名 キリスト教史学会第73回大会(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 袴田 玲
2. 発表標題 救世主マリア? 末期ビザンツ正教思想におけるマリア崇敬
3. 学会等名 ミニシンポジウム「女性性をめぐって 初期・中世キリスト教のテキストが披く地平」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 袴田 玲
2. 発表標題 ビザンツ帝国と正教会
3. 学会等名 東京自由大学公開シンポジウム「ロシアの宗教とウクライナ戦争」(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Rei Hakamada
2. 発表標題 Theotokos (Virgin Mary) as Remedy for Human Being
3. 学会等名 The 14th International Symposium for Future Technology-Creating Better Human Health and Society(ISFT 2023) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 袴田 玲
2. 発表標題 ヘシュカスムと一般民衆 パラマスとイシドロスの民衆教化活動について
3. 学会等名 第58回古代・東方キリスト教研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Rei Hakamada
2. 発表標題 "Mary the Mother of God in Gregory Palamas' Homilies: Her Role in the Deification/ Salvation of Human Beings"
3. 学会等名 Virgin Beyond Borders International Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Rei Hakamada
2. 発表標題 Lay Hesychasts? Isidore and Palamas among Lay People
3. 学会等名 Hesychasm in Context: Theology and Society in the Fourteenth Century (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 袴田 玲
2. 発表標題 東西キリスト教会のマリア理解とその人間神化/聖化における役割 グレゴリオス・パラマスとトマス・アクィナスによるマリア説教の比較分析を通じて
3. 学会等名 東方キリスト教学会第20回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Rei Hakamada
2. 発表標題 Deification for All: Rethinking the Role of Palamas in the History of Hesychasm
3. 学会等名 Late Antique and Byzantine Seminar, Oxford University (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 袴田玲
2. 発表標題 聖母の死(生神女就寝)をめぐるビザンツ正教における理解 グレゴリオス・パラマスの説教から
3. 学会等名 異文化理解と多文化共生 - 神秘主義思想とその実践を通じたイスラームとキリスト教の共生を探って(龍谷大学国際社会文化研究所指定研究) 2019年度第1回研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 袴田玲
2. 発表標題 ヘシュカストと涙
3. 学会等名 第167回教父研究会例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 袴田玲
2. 発表標題 トマス・アクィナス『説教18「地は芽生えさせよ(Germinet Terra)」』におけるマリアの原罪についての理解とその可能性
3. 学会等名 中世哲学会第67回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Rei HAKAMADA
2. 発表標題 Interpretations of the Dormition of the Virgin Mary in Byzantine Church
3. 学会等名 Symposium Women and Con-viviality in the Eastern Christianity (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Rei HAKAMADA
2. 発表標題 God's Image and Likeness: John Chrysostom and Gregory of Nyssa's Views about Human Nature
3. 学会等名 Asia-Pacific Early Christian Studies Society 12th Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 袴田玲
2. 発表標題 グレゴリオス・パラマスの説教における聖母マリア理解 第37講話「マリアの就寝について」を中心に
3. 学会等名 第18回東方キリスト教学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 袴田玲
2. 発表標題 東方キリスト教における神秘主義と民衆
3. 学会等名 異文化理解と多文化共生 - 神秘主義思想とその実践を通じたイスラームとキリスト教の共生を探って (龍谷大学国際社会文化研究所指定研究) 第1回研究会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 佐野東生、久松英二編著	4. 発行年 2024年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 0
3. 書名 キリスト教とイスラーム・対立から共生へ	

1. 著者名 袴田玲、村上寛、坂田奈々絵、阿部善彦、鶴岡賀雄、寒野康太	4. 発行年 2023年
2. 出版社 教友社	5. 総ページ数 261
3. 書名 西方キリスト教の女性 その霊的伝承と雅歌の伝統	

1. 著者名 伊藤邦武、山内志朗、中島隆博、納富信留編（分担執筆：袴田玲）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 288
3. 書名 世界哲学史 3	

1. 著者名 Jean H. MIYAMOTO, Contributors: Naoki KAMIMURA, Rei HAKAMADA	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Kyoyusha	5. 総ページ数 226
3. 書名 Contribution of Women to Con-viviality: In/Ad Spiration to Convivials	

1. 著者名 宮本久雄編著（共著者：出村和彦、山本巍、土橋茂樹、袴田玲、樋笠勝士、佐藤真基子、山本芳久	4. 発行年 2018年
2. 出版社 教友社	5. 総ページ数 201
3. 書名 愛と相生	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Hesychasm in Context: Theology and Society in the Fourteenth Century	開催年 2022年～2022年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------